

令和七年二月 晋賢光明

華嚴宗 晋賢光明寺

今月の法話 一、「謙虚であることの功德力」

二、「供養の功德 彼岸会」

一、「謙虚」であることの功德力

私は時間があるときに横浜駅で辻立ちをして、人々の悩みを聴くことがあります。ある時、私の元を訪れた青年がこのような問いかけをされました。「謙虚とへりくだるとはどう違うのだろうか」と。この青年は「実るほど 頭を垂れる 稲穂かな」という言葉を胸に刻んで、誰に対しても下手に出るようになり、心がけてきたという。しかし、それを続けているとどんどんと自身が卑屈になり、相手はどんどんと増長していった。最後には心を病んでしまったのだという。謙虚であろうと心がけた彼は一体何がいけなかったのでしょうか。

この「実るほどく」の句は作者もいつできたのかもわからないにも関わらず松下幸之助が座右の銘とするなど私達日本人の感性にピンとくる不思議な言葉です。確かに大切な心がけとは思いますが、実る前から頭を垂れてしまえば、そのまま弱って倒れてしまいかねない危険性もあります。この句で戒め用としてるのは「慢心」であり、この「慢」とは仏教用語でして梵語の *mana* を語源とします。そして、この「慢」は根本煩惱のひとつともされ、お釈迦様は「慢から抜け出すことで菩提に至る」とさえ説きました。小乗仏教ではさらに慢を七つに分類しとした。

「慢」 …… 自分よりも劣る人に対して優越感を抱き同等のものには同等であると心を高ぶらせる。

「過慢」 …… 自分と同等の人に対して「自分のほうが優れている」と思い、自分より優れている人に対して「自分と同等だ」と侮る

「慢過慢」 …… 他人のほうが優れているのに自分のほうが上だと見下す

「我慢」 …… 自分本位になること

「増上慢」 …… 悟ってもいないのに「悟った」と勘違いすること

「卑慢」 …… 遙かに優れている人に対して、自分は少ししか劣っていないと思うこと

「邪慢」 …… 間違った行いをして正しいと言い張り、徳がないのにあると言う

『阿毘達磨品類足論』より

この中によく聞く言葉がありますね。そう「我慢」です。これは私達が常日頃から使う我慢とは異なり、「自己本位」といった意味合いで使われます。我慢という言葉は「この人は我慢強い」などとポジティブな用語としても使われますが、仏教においては煩惱の一つであり、「我慢」によって人や仏法を誇るものは直ちに地獄に落ちると言われるほどに厄介な代物です。なぜなら、この「我」こそが「慢」の根源だからです。

先述の七慢はすべて、自己と他者を比べて、自身を過大に見積もることや、他者を軽く扱うことを指します。これらはすべて「私」という物差しが正しくないことを指します。仏法の根本的な考え方に「無我」があります。端的に言えば、この物差しである「私」なるものは物差しとして役に立たない。だってそうでしょう。「私」はその日によっても調子は違うし、年を取れば変わる。何より、「私」というものを客観的に見ることのできる人など存在しないのですから。故に、それにこだわってアレヤコレヤと他者を測ろうとするなどナンセンスだと説くのです。

さて、ここまで来てははじめの「謙虚」の話しに戻りますが、「謙虚」とは「心を虚しくして高ぶらないこと（謙る）」ことを指します。つまり、先述の「慢」を持たずに相手に接することを意味するのです。「謙虚」の本質は「こだわらない心」であり、こだわりなく平等に接してくれる人には自然と敬意と親しみを感ずるものです。では、青年の言う「へりくだる」とはなにか。これは「自己卑下」であり、「こだわらない心」によるのです。その場しのぎであったり、相手への嫌悪から対等な人間として接しないことで、自分を守ろうとすることが、かえって相手を調子づかせてしまったケースと言えます。彼自身も話していく中でそのことに気づきましたが、「謙虚」の実践は極めて難しい。その練習として有効なのが慈悲の祈りです。

皆さんは日常で仏様に祈る勤行で祈願を行うことがあると思います。その際に以下の四種類の祈りを加えてみるのです。

まずは「自分への祈り」と「親しい人への祈り」です。「〇〇の息災安穩のご守護してくださいませように」というような文言で良いでしょう。次に自分に関わる有縁の人への祈りです。「〇〇に関わる全ての

人々の息災安穩のご守護してくださいますように」。最後に無縁の人々や生き物、つまり生きとし生けるすべてのものに対する祈りで「一切の衆生の息災安穩のご守護をしてくださいますように」と祈る。この後半2つの祈りは難しく、有縁の人の中にはあなたにとって嫌な人も含まれるのです。無縁の人の中には凶悪な罪を犯した人もふくまれます。しかし、そのような人であれ、観音菩薩の慈悲の救いの下では平等であるのだと漠然と思ひながら祈ること、「こたわる心」の力を少しづつ少しづつ削いでいくのです。とても厳しく、そして功德の高い修行法なのです。ぜひ、実践してみてくださいませ。

二、先祖供養 彼岸会

今年も三月の彼岸会が近づいてきました。春分と秋分は昼と夜が等しくなることから、あの世とこの世の境界が曖昧になるため先祖供養に良いとされ、日本独自の伝統的な祭祀を行ってきました。インドでは秋分に先祖供養の祭祀を執り行うそうですが、一方で春分にはホーリー祭という豊作祈願のお祭りを行うとか。彼岸とは「向こう岸」、つまり悟りの世界を意味します。日本では三途の川のイメージから単純に死後の世界の意味で用いられます。日本での彼岸会の始まりは八〇六年の早良親王の追善供養であるとされます。この時も僧侶による読経が行われ、怨霊となった早良親王を鎮める意味合いがあったのです。日本の追善供養には、故人が怨霊とならないようにするという意味合いも含まれるのです。亡くなった人は、現世の報いを受けるわけですが、現世で行いが悪ければ善因善果悪因悪果の法則に基づき死後も苦しむこととなります。故に、観音菩薩の慈悲にすがり、追善の供養を行うことで滅罪生善の祈りを行うのです。

仏道における最大の利益法はこの「滅罪生善」(過去の因縁を断じ、善行を積むこと)なのです。不空羅索観音菩薩は滅罪のご利益が非常に強い菩薩様で神変真言経に曰く「能く一切の罪業を消滅せしむ」と。来月に東大寺二月堂で行われる修二会は悔過法要と呼ばれ、衆生の罪業を懺悔する法であり、滅罪の法なのです。さらに、この修二会は自分自身の罪業のみならず、一切衆生の罪業を懺悔し国家安泰・世界平和を祈念するものです。これは先述の祈りと同じであり、私達練行衆は自分自身へのこたわる心を排して、すべての生きとし生けるものの幸せを祈って一心に懺悔し五体を打ち付けるのです。

もちろん、皆さんは板に膝を打ち付ける必要はありません。観音様の御前にて一心に読経し、ご先祖様の追善を祈ることが自身の修行となるのです。よくよくご祈念くださいませ。

合掌

○東大寺修二会 住職の新過去聴聞のご案内

二月二十日より三月十五日未明まで住職の大仙が東大寺の二月堂で行われる修二会の行法に参籠いたします。修二会とは旧暦の二月に修せられることから名付けられ、十一面観音菩薩の前で一心に懺悔を行い国家安泰・五穀豊穡を祈念する法要です。今年で一二七四回目となり、奈良時代から戦国時代や戦時下を経てもお一度も途切れることなく続いてきた法要です。

今回で住職の参籠は五回目となり、「過去帳」の奉読を任せられることとなりました。この「過去帳」は聖武天皇に始まり、源頼朝や足利尊氏といった権力をもった方々のお名前を読み上げ追善の供養を行うのです。本来は上の役職の練行衆が行いますが五年目の練行衆は一度だけ任せられ、これを持って一人前の練行衆として認められるのです。そんな過去帳の奉読は三月五日の午後十時頃から執り行われます。信徒の皆様での聴聞の企画もごさいますので詳しくは別紙をご参照くださいませ。

また、参籠のお見舞いを受け付けております。これは伝統的に参籠見舞いとしておりますが、ともに祈るための布施であり、修二会という行事への参加を意味します。ともに滅罪生善の祈りへご参加くださいませ。数に限りがございますが、お見舞いを頂戴した方には「牛玉札」もしくは「壇供(お供え餅)」をお渡しさせていただきます。

南無日光妙法蓮華經

*二月のラッキーカラー、暗剣殺、五黄殺(二月四日〜三月四日) ※一年通してのラッキーカラーは緑色です。
*暗剣殺、五黄殺とは凶方位の事で移転増築や旅行など控えた方が良い方位となります。

二月のラッキーカラー 緑、白、金 暗剣殺 東 五黄殺 西

【お知らせ】

- ① 三月の勉強会の日程：普賢光明寺(鎌倉) 三月一日(土) 二日(日) 四日(火) 正午より
横須賀支部は住職が不在のため鎌倉と合同になります。 小田原別院：三月三十日(日) 午後二時より。
- ② 仏像彫刻教室：二月十六日(日) 三月九日(日) 正午より
- ③ お彼岸：三月十七日(月)〜二十三日(日) 永代供養は二十日正午厳修 ご予約はお早めに。
- ④ 修二会のご祈願を受け付けております。(締め切りは二月二十三日)